

川越さん親子（中央）と本園さん一家

一与論町古里



温かい人透き通った海…充実の高校生活 与論留学感謝募集に協力

横浜出身・川越さん

14歳で横浜市の親元を離れ、与論島で暮らす少女がいる。島の人の温かさや、透き通った海に魅せられて単身移住してきた与論高校3年の川越夢津美さん(18)。充実した日々を過ごした与論に恩返しすることを誓い、4月から東京の大学に通う。夢津美さんの「島留学」をきっかけに、人口減少に悩む与論町は、関東や関西に住む生徒を島に呼び込む動きを本格化させる。

町、人口増へ呼び込み本腰

純子さんは仕事が忙しく、帰省するのはいつも夜。1人で過ごすことが増えた夢津美さんの頭に浮かんだのは、以前、純子さんと旅行で偶然訪れた与論島の民宿「楽園荘」だった。

楽園荘は本園さん一家4人が切り盛りする。パックバツカーや修学旅行の引率教諭、近所の人々がひっきりなしに出入りする。大家族へのあこがれもあり、中2の夏休みを使って1人で訪ねた。住み込みで民宿を手伝

えは」という言葉で移住を決めた。

2011年4月、与論中学校に転校。問題は、夢津美さんが希望した与論高校への進学だった。

当時の町教育長、田中 國重さん(72)によると、県教育委員会は与論高への進学に難色を示した。当時は、保護者が住む「通学区域(学区)」内の県立普通科高校に進学する規則があったからだ。

町は少子化で生徒が減っている与論高にとって

高に入学した後、県外の中学生が鹿児島に進学するハードルは大きく下がった。

与論高の入学者はこの15年で半減し、本年度の在校生は160人。危機感を募らせる町教委は4月から、関東や関西地区などの大都市圏に向いて、生徒獲得に本格的に乗り出す。

配布するパンフレットには、与論の魅力や夢津美さんの体験記を掲載。教育大使として町に協力する夢津美さんは、将来は観光業に携わり、与論に帰るつもりだ。

島の暮らしは都会の子どもにとって魅力的。町は夢津美さんを通じて、あらためて足元の室に気付くことになった。

与論はかりでなく、生徒確保に悩む他の自治体も、県外に目を向けるきっかけになるかもしれない。(永山一樹、五反田和美)

2日にあった与論高校の卒業式。保護者席に横浜市から訪れた母純子さん(45)の姿があった。隣には与論で父親代わりだった本園秀幸さん(41)。カメフラを構えた本園さんがピースサインを送ると、入場してきた夢津美さんに笑みがこぼれた。

◆ 神奈川県で育った夢津美さんは、シングルマザーの純子さんの仕事の都合で、中学2年で横浜市に転居した。それまでバレーボール部に入っていたが、途中で新しいチームに加わることにためらいがあった。次第にファーストフード店やゲームセンターを転々とするような生活になり、「刺激のない生活」が続いた。

合で、中学2年で横浜市に転居した。それまでバレーボール部に入っていたが、途中で新しいチームに加わることにためらいがあった。次第にファーストフード店やゲームセンターを転々とするような生活になり、「刺激のない生活」が続いた。

いながら1カ月過ごす。与論に夢中になっていった。「いろいろな大人と出会い、世界が広がった。方言が飛び交う地域の人のとふれ合いは温かいが、毎日きれいな海で遊ぶ。都会にはない刺激的な生活だった」

1人の入学がどれほど大切かを訴え続けた。1年後、県教委が進学を認め、たことについて、田中さんは「特例中の特例だったと思う」と振り返る。

県教委は13年5月、島や1学年120人以下の小規模校の学区を撤廃した。夢津美さんが与論

と、県外に目を向けるきっかけになるかもしれない。(永山一樹、五反田和美)